

## 女川貝塚出土の遺物について

磯村 朝次郎・渡部 晟

### I はじめに

日本では、太平洋岸に比べて日本海岸に貝塚が少ないことはよく知られた事実である。秋田県においてもこれまで確認された貝塚は、落合・柏子所(以上能代市)・萱刈沢(八竜町)・角間崎・女川(以上男鹿市)・児桜・新屋浜(以上秋田市)・菖蒲崎(本荘市)・西目(西目町)の9箇所を数えるにすぎない(富樫、1975)。なお西村(1957)はこのほかにオトドの岩屋貝塚(八郎潟町)を記録している。このうち調査が十分になされ、その結果が公表されているのは、柏子所・萱刈沢・角間崎・児桜の4貝塚だけである。

本稿で述べる女川貝塚については発掘調査が行われていないが、その時代は縄文晩期とされており、西村(1957)、藤岡(1965)、奈良・豊島(1967)、富樫(1975)などに簡単な紹介が散見されるだけである。

このたび筆者らは、かつて磯村が表面採集した本貝塚およびその近傍の遺物包含層出土の遺物について改めて検討する機会をもった。秋田県における数少ない貝塚のデータの蓄積に役立つことを願い、その結果をとりまとめて報告するしだいである。

### II 遺跡の位置と環境

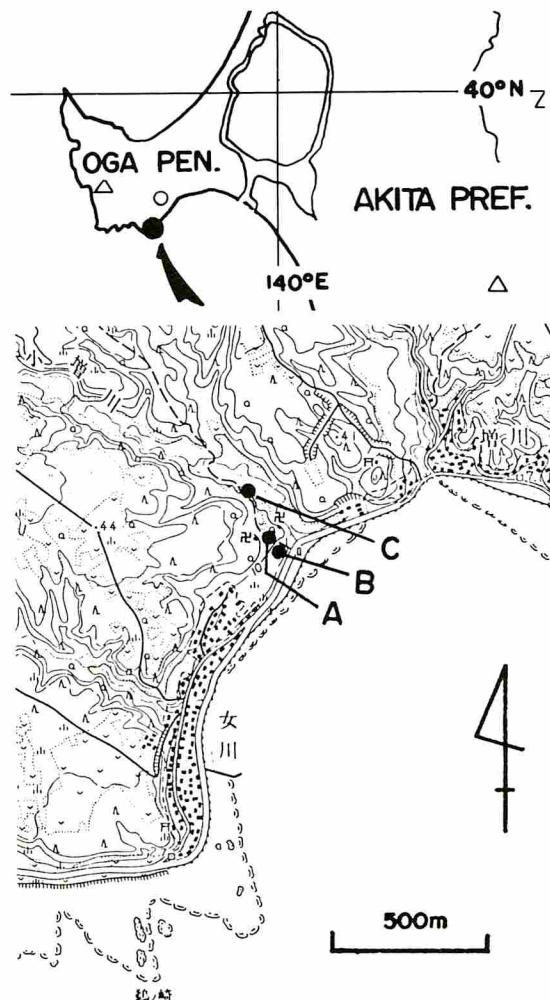
女川貝塚は男鹿市船川港女川字堂の前6番地に所在する。地籍名は堂の前であるが、従来の呼称にしたがってこの名称を用いる。

本貝塚は真崎(1897)に「南磯、女川地藏院付近」と記載されているところから、1957年4月に磯村らが調査したところ、墓地斜面の作業道の路盤に貝殻が点在しており、それがきっかけで厚さ約10cmの混土貝層が検出され貝塚と判明したのである。

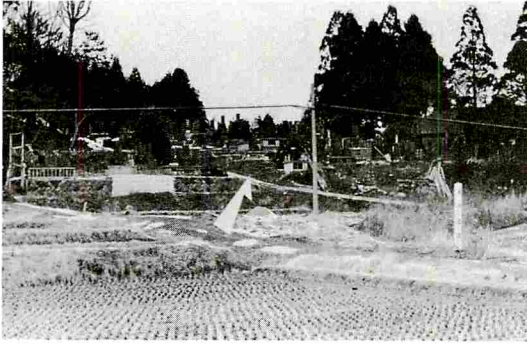
貝塚のある墓地は男鹿半島南磯海岸、女川と増川部落のほぼ中間の地藏院と祥雲寺にはさまれており、汀線より約150mの女川台地の末端、海拔10数mの位置にある(第1図A地点)。現地状況を第2図に示した。貝層の確認地点は今のところここだけであるが、墓地の下方は狭隘な海岸低地で、南西の女川部落に向けて水田化されており、この水田の中にも遺物包含層がある(第1図B地点)。また貝塚の北西約150m、小増川に臨む台地の末端部(旧果樹園)にも土・石器の包含層が認められる

(第1図C地点)。こうしたことから、遺跡は貝塚を中心として意外に広範囲に及んでいるものと推定される。本稿ではこの3地点から出土した遺物についてのべる。

遺跡地の東側には標高683mの毛無山東麓に発する延長約5kmの小増川が流れ、日本海に注いでいる。女川台地の南端、北西の本山、毛無山を背にして、遺跡地周辺は冬季の季節風をまともにうけることもなく、比較的し



第1図 女川貝塚(A)とその付近の遺物包含層の位置(B、C) 国土地理院発行2万5千分の1地形図「船川」を使用。



第2図 女川貝塚の現況

矢印の先で貝層が確認された

のぎやすい立地となっている。

遺跡前面の海は「寺の澗」とよばれ、泥岩からなる海食台一帯にナメトコという一が発達しており、小増川河口から女川部落にかけてはわずかな砂浜が形成されてい

る。干潮時には、この寺の澗は三ツ岩、丸石とよぶ岩礁を点々と露出させる。

このあたりの海岸にはウミナ類などの貝類が多くみられるほか、元秋田県沿岸漁民研修所長で女川在住の船木武二氏によれば、かつては魚族のきわめて豊富なところで、寺の澗ではスズキ、カワダイ、ソエ、アイナメ、ボラなどが大量に漁獲され、沖の横瀬はサザエの好漁場で、遠浅なナメトコではアオサが多くとれたばかりでなく、小増川にはその名も示すようにマスやサケが遡上したという。また11月下旬頃になると時おり巨大なタルイカの寄ることもあったということである。

### Ⅲ 混土貝層から出土した貝類

西村(1957)は、女川貝塚産の貝としてスガイ・サザエ・レイシガイ・サルボウガイの4種を報告しており、その後藤岡(1965)は以上の種のほかにバイ・コシタカガンガラガイを加えて計6種を記録している。このたび

第1表 女川貝塚出土の貝類

種名	分	布**	生息深度	生息底質
ミミガイ科(属・種不明)				
イシダタミガイ	北(南部以南)、本、四、九、朝		潮間帯	岩礁、礫
コシタカガンガラガイ	サハリン、北、本、四、九、台、朝、中		潮間帯—20m	岩礁、礫
サザエ*	北(南部以南)、本、四、九、朝		潮間帯—20m	岩礁
スガイ	本(房総半島以南)、四、九、朝		潮間帯	岩礁、礫
オオヘビガイ	北(南部以南)、本、四、九、奄、沖、台、朝、中		潮間帯—10m	岩礁、礫
ウミナ	本、四、九、奄		潮間帯下部	岩礁、砂、泥
シドロガイ	本(房総半島以南)、四、九、奄、沖		潮間帯—50m	砂、砂泥
レイシガイ	北(南部以南)、本、四、九、朝、台、中		潮間帯—20m	岩礁
バイ	北(南部以南)、本、四、九、奄、沖、朝、中		潮間帯—50m	砂
テングニシ	本(房総以南)、四、九、インド、太平洋		10—50m	砂
サルボウガイ	北(南部以南)、本、四、九、朝、台、中(内湾)		潮間帯—10m	砂泥
アカガイ類(種不明)				
ハマグリ	北(南西部以南)、本、四、九、台、朝、中、比、東南アジア(内湾)		潮間帯—20m	砂泥
バカガイ科(属・種不明)				
シラトリガイモドキ	北(南部以南)、本、四、九、朝、中		潮間帯—20m	礫泥
マルシラトリガイモドキ	本(三浦半島以南)、四、九、日(秋田以南)		潮間帯—20m	礫泥

\* 今回調査した標本には含まれていない。

\*\* 北：北海道、本：本州、四：四国、九：九州、奄：奄美大島、沖：沖縄列島、台：台湾、朝：朝鮮、中：中国、比：フィリピン、日：日本海

分布、生息深度・底質は主として肥後(1973)による。

調査した標本には第1表に示したように腹足類10種、二枚貝類6種計16種が含まれているが、西村や藤岡の報告にあるものうちサザエ *Batillus cornatus* (SOLANDER) は認められなかった。したがって今のところ本貝塚産の貝類としては17種が確認されたことになる。なお貝類以外の自然遺物としてはニホンジカ、イノシシ(金子、1974 MS) や磯海綿(西村、1957) が知られている。

#### 1 出土した種・個体について

*Haliotidae* gen. et sp. indet. (図版 I、図 1) わずかに、破損した1個体分の殻頂部が得られているだけなので属・種の同定ができない。

*Monodonta (Monodonta) labio* (LINNÉ) イシダミガイ(図版 I、図 2) 破損しており、1個体分の体層殻口部分が得られているだけであるが、殻表の螺肋が石だたみ状で14本あること、臍孔がないこと、軸唇下端に強い牙があることなど、本種の特徴を示している。

*Omphalius rusticus* (GMELIN) コシカカガンガラガイ(図版 I、図 3) 殻高 20.2 mm、殻最大径 19.6 mm。3個体得られておりいずれも成貝である。このうち2個体はほとんど破損していない。

*Lunella coronata corensis* (RÉCLUZ) スガイ(図版 I、図 4) 殻高 16.7 mm。約30個体と最も個体数が多く、保存はおおむね良好で、大部分が成貝である。

*Serpulorbis imbricatus* (DUNKER) オオヘビガイ(図版 I、図 6) 2個体得られているが、いずれも破損している。

*Batillaria multiformis* (LISCHKE) ウミニナ(図版 I、図 5) 殻高 28.8 mm + 1、殻最大径 12.8 mm +。3個体得られており、うち2個体が成貝。いずれの個体も殻口外唇が破損しかつ各螺層の殻口の反対側が磨損している。近縁のウミニナ、イボウミニナに比べて太いこと、殻表の彫刻が石だたみ状であることなどから本種に同定される。

*Doxandar japonicus* (REEVE) シドロガイ(図版 I、図 7) 殻高 55.5 mm +、殻最大径 18.5 mm +。1個体のみ得られている。殻口外唇は破損して失なわれている。

*Reishia bronni* (DUNKER) レイシガイ(図版 I、図 9) 殻高 50.2 mm +、殻最大径 31.9 mm。幼貝から成貝まで5個体得られている。殻口外唇あるいは殻頂部の破損している個体はあるが、おおむね保存は完全である。

*Babylonia japonica* (REEVE) バイ(図版 I、図 8) 殻高 68.8 mm、殻最大径 38.7 mm。6個体得られいず

れも成貝。ほとんど完全な個体から、破片となった個体までである。殻表にはうすく模様を残している。

*Pugilina (Hemifusus) ternatana* (GMELIN) テングニシ(図版 I、図 9) 殻高 147.8 mm +、殻最大径 71.6 mm。ほぼ完全な成貝と幼貝各1個体および破片が得られている。

*Anadara (Scapharca) subrenata* (LISCHKE) サルボウガイ(図版 II、図 2) 殻高 42.9 mm、殻長 51.5 mm、殻深 18.5 mm。ほぼ完全な右殻片が1個得られているだけである。放射肋は32本ある。

*Anadara (Scapharca)* sp. indet. (図版 II、図 1) 左殻片であるが破損しており種の同定ができない。全体の形がかなり大きく、放射肋も数えられるかぎりでは30本近くあり明らかに前種とは異なる。破損の状態からみて貝輪をつくったものと思われる。

*Meretrix lusoria* (RÖDING) ハマグリ(図版 II、図 4) 殻高 44.5 mm。破損した左右の殻片が各1個ずつ得られているが同一個体ではない。殻が比較的薄質で、腹縁の湾曲が強いことからチョウセンハマグリではなく、本種に同定されよう。

*Macridae* gen. et sp. indet. (図版 II、図 6) 右殻の殻頂部が1個得られているだけなので、属・種の同定はできないが、弾帯受けや絞歯の形態は明らかに本科に属する種であることを示している。また殻は薄質であり、殻頂部から全体の大きさを推定すると、殻長が100 mmをはるかに超えることが確実であることなどからアリソガイである可能性もある。

*Heteromacoma irus* (HANLEY) シラトリガイモドキ(図版 II、図 3) 殻高 35.5 mm、殻長 44.9 mm、殻深 8.2 mm。ほぼ完全な右殻片と本種と思われる破片がそれぞれ1個ずつ得られている。

*Heteromacoma oyamai* KIRA マルシラトリガイモドキ(図版 II、図 5) 殻高 18.8 mm、殻長 20.4 mm +、殻深 6.4 mm +。やや磨耗した右殻片が1個得られている。套線彎入の形態や前節痕がきわめて狭長であることなど、本種の特徴を示している。殻中央部の穴はその断面が新しいことからみて、この標本が地表に現われて以後の破損であろう。

#### 2 貝類群の特徴

a) 個体の大きさからみて、成貝が主体となっている。  
b) すべてのが海生種であり、低鹹度の水域に生息する種および陸貝は認められない。

c) 生息する深度を現生貝のそれと比較してみると、テングニシをのぞいては潮間帯を含み、深いところまですむ種でも50 mを超えず、多くは10~20 m以浅にすむ種で

ある。

d) 生息する底質をみると、インダタミガイ・コシタカガンガラガイなど岩礁や礫底にすむ種と、バイ・サルボウガイなど砂や砂泥底にすむ種が混合しており、前者がやや多い。個体数でも前者に属するものが多い。

e) 現生貝の地理的分布と比較してみると、北海道南部を分布の北限とする種が大部分でいわゆる暖流系の種を主体としており、寒流系の種は認められない。

f) 多くは現在男鹿半島沿岸にふつうにみられる種であるが、渡辺（1969MS）のリストと比較するとハマグリとシラトリガイモドキの2種は秋田県に現生が確認されていない。ただしシラトリガイモドキは死貝が採集された記録があり（高安、1976）、ハマグリもOYAMA（1973）によれば日本海側で北緯43度まで確認されているので、両種とも本島の沿岸に生息している可能性は否定できない。

g) 西村（1957）によって報告された角間崎貝塚（縄文前期）の貝類（20種、陸貝2種を含む）と比較すると、インダタミガイ・コシタカガンガラガイ・サザエ・バイ・テングニシ・サルボウガイ・ハマグリが共通している。

#### IV 人工遺物

##### 1 混土貝層出土の遺物

貝塚確認時およびその後、作業道の路盤にあらわれていた採集遺物である。

図版Ⅲ、図1、9は鉢形土器の高台部であろう。1は高さ5.5cm、底径10.5cm、精選された胎土で表面茶褐色を呈し、上下に2本の平行沈線を描き、その間を工文字、変形工文字で埋める。沈線の中に朱塗りの痕跡を残している。底面内は横ナデ整形、底上面は黒褐色で径2.5cmの円形を沈線で描いている。

9は高さ3.7cm、底径6.5cm、黒褐色、上5本、下1本の沈線を施し、その間を工字状文で埋める。1と同じ底の上面に径1.5cmの円形の沈線を施している。

図2は鉢形土器の口縁部であろうか。山形の突起を有し、ゆるやかな波状の口縁をなす3と同じく、口縁の内側に横位の沈線を施している。

図4は鉢あるいは壺形土器の胴部、または肩部に相当すると思われる。流水文風の工字状文、きわめて堅緻な焼成で断面は中央から、内側は黒褐色、外側は茶褐色で、あたかも釉薬を施し焼成したかのように載然としている。

図8は鋸歯状の口唇下に3本の平行沈線文、縦走する縄文で鉢形土器であろう。煤状の黒色物質の付着が認め

られる。その他の土器片を含め、いずれも大洞A式（山内、1930）に対比されるものと考えられる。

図10、11の石器は硬質頁岩製の石槍。図版Ⅷ、図77は同じく頁岩の石錐。78は厚さ0.4cm、小形のノミ状の石斧で緑色の泥岩。79は安山岩製の磨製石斧。87は小形の石棒で頭部を五角形状に加工している。粘板岩製。

##### 2 貝塚下方水田の遺物

この地点での遺物は水田排水路掘上げ時、電柱埋設時に出土したものである。

図版Ⅳ、図12～19は大部分は深鉢形を呈する土器の口縁部と胴部であろう。12～14は横あるいは縦位斜位にやや不整形な平行沈線を描き、胎土あらく、しばしば微細な礫を含み、焼成はもろい。

図15、鉢形土器の胴部か。茶褐色を呈し、焼成きわめて堅緻で、縦位3本の平行沈線に相接する不整な円ないし楕円を3重に描く。16、瘤状の小突起を付し、口唇部から口縁部にかけて4～5本の平行沈線間に縦位の細い刻目を入れている。胎土は精選され、焼成も良好である。

図17、胎土よく、茶褐色を呈する鉢形土器であろう。口縁部が大きく花卉状をなし、口唇部内側に縦位の太い刻目を付している。

図16は宮戸Ⅲb（後藤、1958）、その他は大部分、十腰内I式（磯崎、1968・青森県教委、1975）に対比されるものと思われる。

石器の図20は安山岩製の砥石状石器。21は泥岩製の三脚石器。22の石棒は粘板岩製。23は楕円形を呈し、断面はV字状をなす真珠岩製である。径2.5cmの円形の凹部が両面对称な位置にほられ、左上部は欠損しているが、ここにも同じく円形の凹部がほられていたものと推定される。これに似た石器は同じく晩期終末に至るまでの遺物を出す上鮪川遺跡からも採集されているが、凹部はない。

##### 3 旧果樹園出土の遺物

ここからは上記の2地点よりやや多量の遺物が出土している。図版Ⅴ～図版Ⅷ、（図77、78、79、87を除く）がそれである。

図版Ⅴ、図24～36、図版Ⅵ、図37～40（I）と図版Ⅵ、図41～52、図版Ⅶ、図53～70（II）に2分できるようである。

I群は縄文を全く用いず沈線を主体とした土器群である。図36を除き、深鉢形を呈する土器と思われる。口縁に4個以上の突起が発達するもの、波状をなすもの、平縁のものに区分され、さらに口縁の内反するものと外反するものがある。

図24、25は内外面とも灰白色を呈し、胎土は精選されている。曲線を用い入組風の沈線文を描く。24の波状の口唇部のふくらみは内外ともに細い粘土紐のはりつけによるものである。26は平縁、黒褐色、27は波状をなすが口唇部は24と同一手法によっている。平行沈線を弧線で連結する点は図版Ⅳ、図12と全く同じである。

図28～36は平行沈線と曲線文の組合せによる施文構成。29～31、36は黒褐色、33は茶褐色、その他は灰白色。28、29は内面に横位の擦痕、砂粒を含む。33は内側に横ナデの痕跡がある。39、40は沈線による網目状文。

Ⅱ群、図版Ⅵ、図41は研磨され黒色を呈し、42は茶褐色、薄手で、かすかに縄文の痕跡が残る入組状三又文。大洞B式に対比されると思われる。

図43は茶褐色を呈する深鉢形土器と思われる。44、45は黒褐色の鉢形土器。口縁に羊歯状文を施文する。大洞BC式に対比されるであろう。

図46、47、49～56、口縁部の平行沈線の間を刺痕を充填し、体部文様はいわゆるすり消し縄文による雲形文。大洞C1式に相当か。48、図版7、図57～59は雲形文の平行線化の傾向がうかがわれる。59は沈状をなし、口唇部に縦位の刻目を付す。60は口縁に工字文、61は平行沈線、69は口唇部にわずかな縄文帯を付し、口唇内側に1本の沈線を横位にひく。

図70は高さ6.8 cm、口径19.5 cmの浅体形土器。口唇に瘤状突起を付し、3本の平行沈線がめぐる。62～68は平縁、小波状の口縁をなし、無文、縄文のみものもの、横位の条痕を付した鉢形土器と思われる。

図版Ⅷの石器71は柳葉形、92は有柄の石鏃、73は石槍、74は中央部両端よりノッチを入れている。75、76は石匙。以上いずれも硬質頁岩製。80は磨製石斧で緑、乳白色をまじえた凝灰岩。81～83は三脚石器、貝塚下方水田中のものと同じく泥岩。84、流紋岩製の鍬状石器。85、86、88は石棒で粘板岩。89は泥岩製勾玉である。

## V 考 察

### 1 貝類に関して

秋田県内のほとんどの貝塚から出土している汽水生のヤマトシジミが認められないことは、本貝塚の最大の特徴といえよう。このことは、本貝塚が現海岸線に直接面して形成されたティピカルな外洋形貝塚である(金子、1974 MS)ことから当然とも言えるが、貝類採取の範囲が比較的限られていたことを意味するものとも思われる。

女川貝塚の立地している付近の海岸は、現在磯浜が主で砂浜の発達はいわゆる貧弱である。本貝塚産の貝類が

岩礁や磯底生の種を個体数においても主体としている点で、当時の地形は現在と大差なかったと考えられる。もしそうであるならば、ハマグリのように内湾生の種や砂底生の種もかなりの高率で含まれているので、現在砂浜が広く発達しており、砂丘が縄文後期以前から形成されていることから考えて(角田、1975) 当時もそうであったと思われる脇本以東まで採取範囲になっていた可能性がある。

また出土した貝類の多くは、現在も男鹿半島沿岸にふつうにみられるものであることからして、当時の海水温等は現在とあまり異ってはいなかったと考えられる。

なお、ウミナはいずれの個体も保存状態からみて、採取された時点ですでに死貝であったと思われる。こうしたものの混在している意味は、たとえば本種の死貝を宿貝としたヤドカリを食用の目的として採取したとか、あるいは死貝、生貝にかかわりなく採取し持ち帰ってから生貝のみを選別したとかいろいろと想像はされるが、資料の限られている現時点ではまだ明らかにできない問題である。

### 2 人工遺物に関して

人工遺物についても資料は限られているので、これから判断するのは早計であるかもしれないが、女川貝塚周辺に最初に人が移り住んだのは縄文後期十腰内I式期ころからで、宮戸Ⅲb式をへて、晩期大洞B～BC以後、A式期とはほぼ晩期の全期間にわたっているものと推定される。

しかし、貝塚それ自体が営まれた時期は未発掘で推定の域にとどまるが、混土貝層の出土資料がA式期に集中する傾向があるところから、あるいは後期にさかのぼるものでないかもしれない。

また、遺跡の立地から考えて、製塩関係の遺物を包含している可能性も予想されることを付記しておきたい。

## 文 献

- 青森県教育委員会(1975): 中の平遺跡発掘調査報告書。  
 藤岡一男(1965): 八郎瀨の地史。八郎瀨の研究、31—51。  
 後藤勝彦(1962): 宮城県台圃貝塚出土の土器、考古学雑誌、48、(1)。  
 肥後俊一(1973)編: 日本列島周辺海産貝類総目録。  
 磯崎正彦(1968): 十腰内遺跡。岩木山。  
 金子浩昌(1974 MS): 秋田県下縄文貝塚出土の動物遺存体について。秋田県立博物館委託調査報告書。  
 真崎勇助(1897): 秋田県管内鍬石産地一覧表—南秋田

郡の部—『南秋田郡誌』。

奈良修介・豊島 昂 (1967): 秋田県の考古学. 吉川弘文館.

西村 正 (1957): 県内貝塚の貝について. 秋田考古学、(7)、13—17.

OYAMA K. (1973): Revision of Matajira YOKOYAMA'S Type Mollusca from the Tertiary and Quaternary of the Kanto Area. *Palaeot. Soc. Japan, Special Papers*, (17).

角田清美 (1975): 日本海および東シナ海沿岸の主な砂丘地帯の形成期と固定期について. 第四紀研究、14、

(4)、251—276.

高安泰助 (1976): 男鹿半島周辺現世貝類. 鉄鋼業における排出物等の健康および生活環境に及ぼす影響調査Ⅲ、秋田県、付属資料.

富樫泰時 (1975): 葛蒲崎貝塚と秋田の貝塚. 鶴舞、(31)、48—57. 本荘市文化財保護協会.

渡辺浩記 (1969 MS): 秋田県産海の貝の目録.

山内清男 (1930): 所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄文式土器の終末. 考古学、1、(3). 日本考古学選集21 (1974) 所収.

(本稿執筆後、磯村が金子浩昌氏に鑑定を依頼していた本貝塚出土の動物骨に関する報告書が届いた。それには、動物骨としてスズキ、タイ科の一種、サバ、アビ科の一種、ウ、アナグマ、イノシシ、ニホンジカのほか、ヒトの上腕骨片1点が認められること、それらの中には人為的に切断した痕跡をもつ標本があることや、鹿角を材料とした銚頭についても述べられている。)

## 図 版 説 明

### 図版 I 混土貝層出土腹足類 (×1、ただし9は× $\frac{2}{3}$ )

- |    |                                                |            |
|----|------------------------------------------------|------------|
| 1  | <i>Haliotidae</i> gen. et sp. indet.           |            |
| 2  | <i>Monodonta (Monodonta) labio</i> (LINNÉ)     | インダタミガイ    |
| 3  | <i>Omphalius rusticus</i> (GMELIN)             | コシタカガンガラガイ |
| 4  | <i>Lunella coronata coreensis</i> (RÉCLUZ)     | スガイ        |
| 5  | <i>Batillaria multiformis</i> (LISCHKE)        | ウミニナ       |
| 6  | <i>Serpulorbis imbricatus</i> (DUNKER)         | オオヘビガイ     |
| 7  | <i>Doxander japonicus</i> (REEVE)              | シドロガイ      |
| 8  | <i>Babylonia japonica</i> (REEVE)              | バイ         |
| 9  | <i>Pugilina (Hemifusus) ternatana</i> (GMELIN) | テングニシ      |
| 10 | <i>Reishia bronni</i> (DUNKER)                 | レイシガイ      |

### 図版 II 混土貝層出土二枚貝類 (×1)

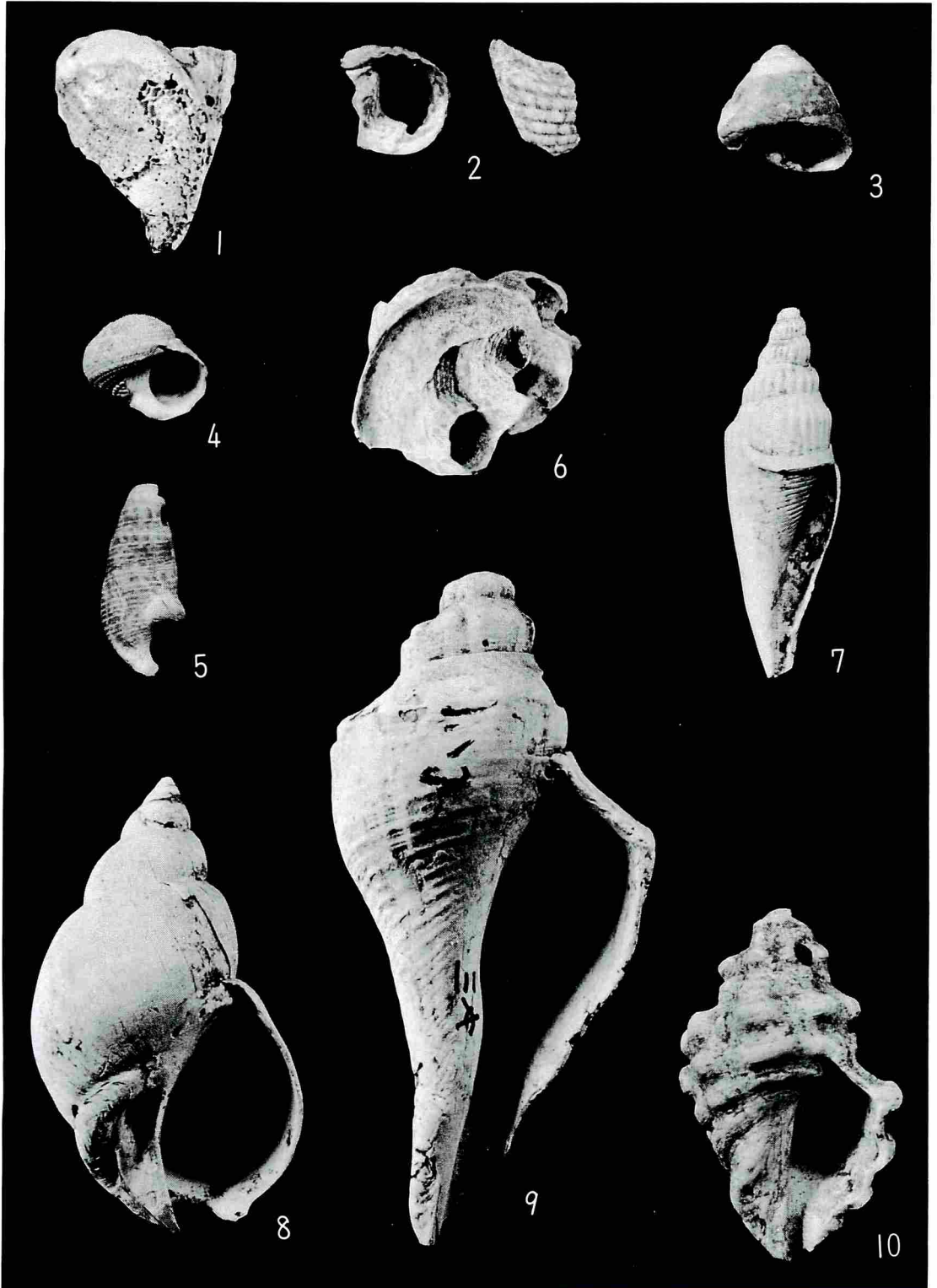
- |   |                                                 |             |
|---|-------------------------------------------------|-------------|
| 1 | <i>Anadara (Scapharca)</i> sp. indet.           |             |
| 2 | <i>Anadara (Scapharca) subcrenata</i> (LISCHKE) | サルボウガイ      |
| 3 | <i>Heteromacoma irus</i> (HANLEY)               | シラトリガイモドキ   |
| 4 | <i>Meretrix lusoria</i> (RÖDING)                | ハマグリ        |
| 5 | <i>Heteromacoma oyamai</i> KIRA                 | マルシラトリガイモドキ |
| 6 | Mactridae gen. et sp. indet.                    |             |

### 図版 III 混土貝層出土遺物

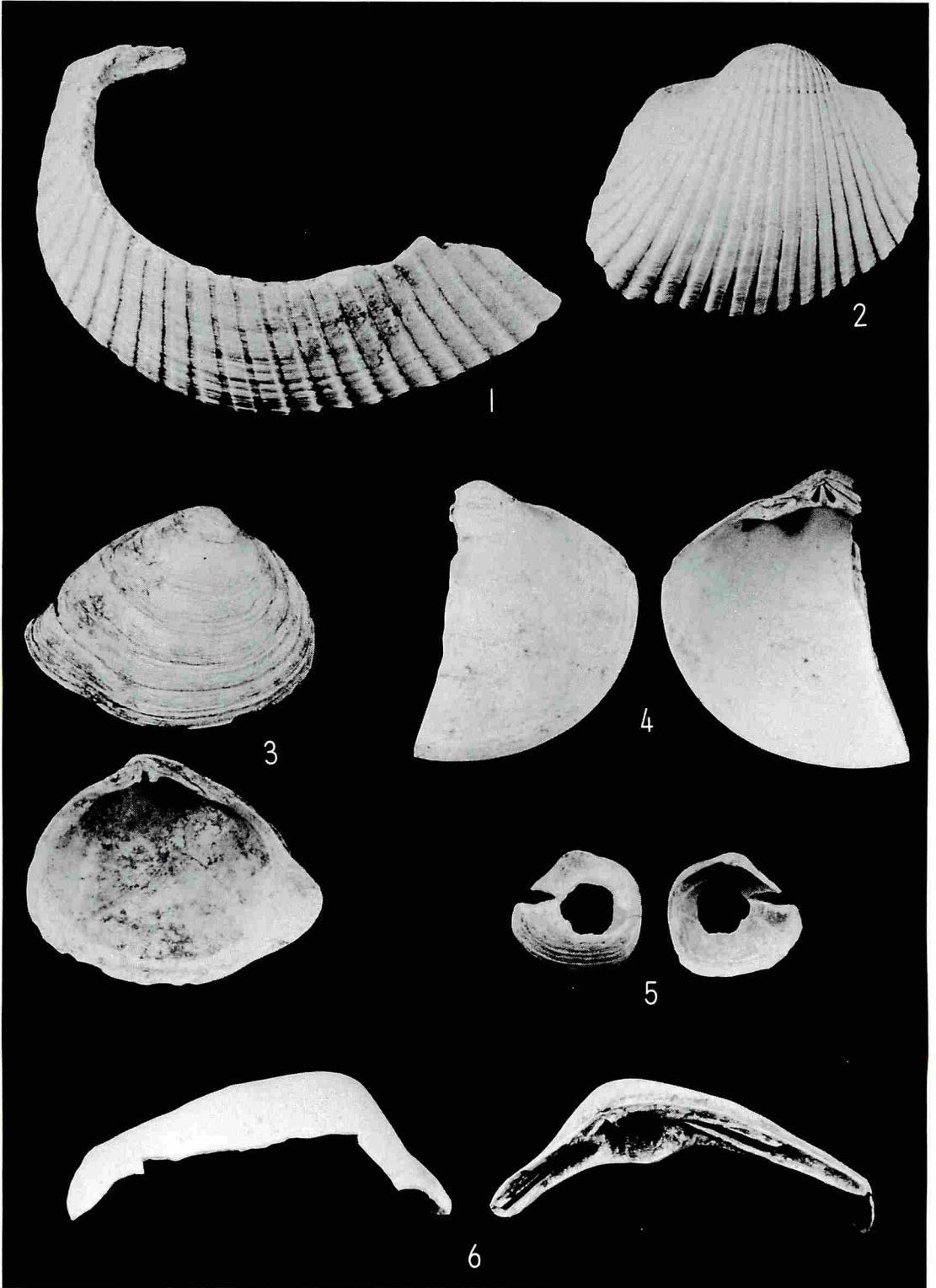
### 図版 IV 貝塚下方水田出土遺物

### 図版 V—VII 旧果樹園出土遺物 (但し77、78、79、87は混土貝層出土)

図版 I

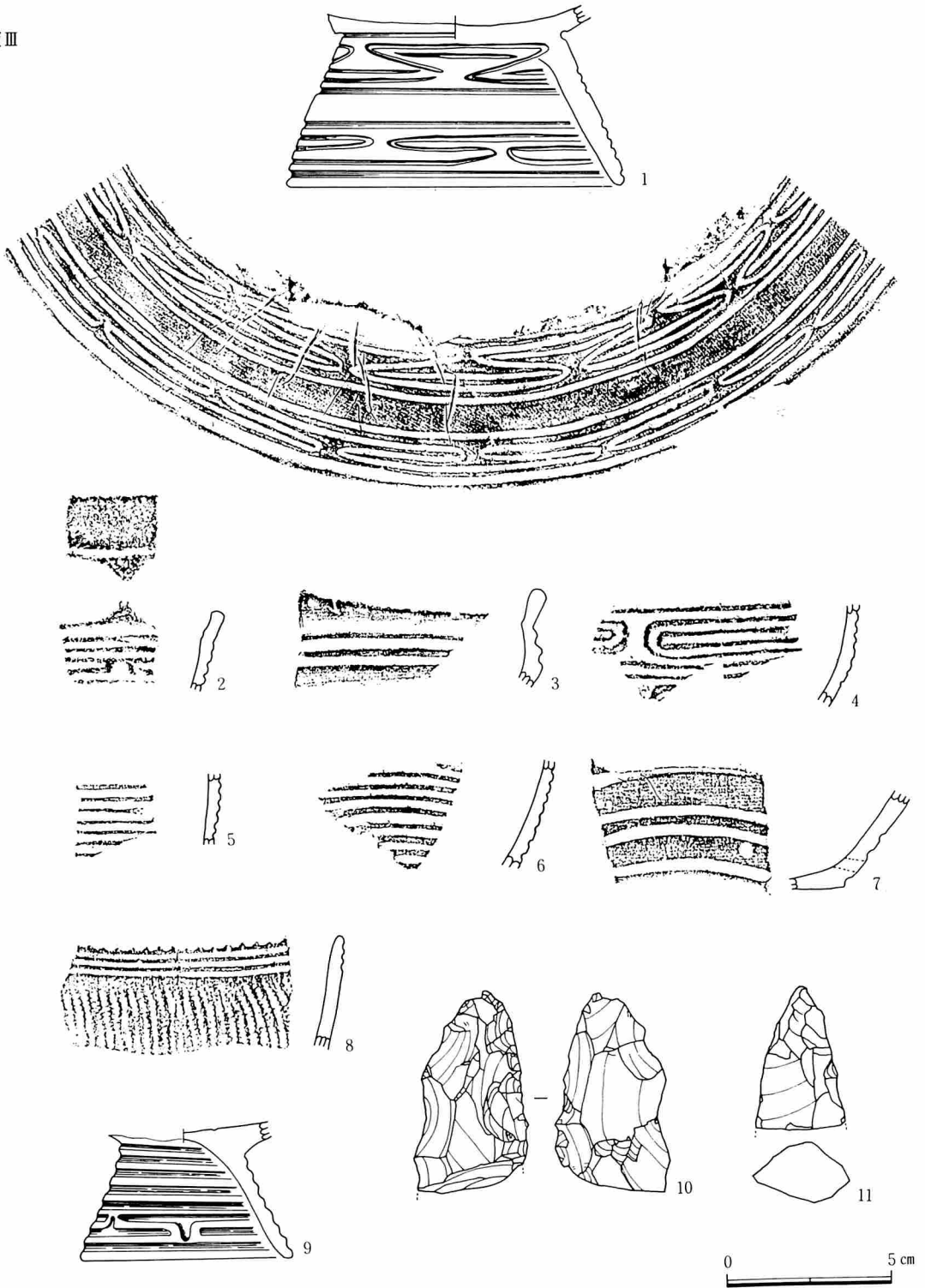


図版 II

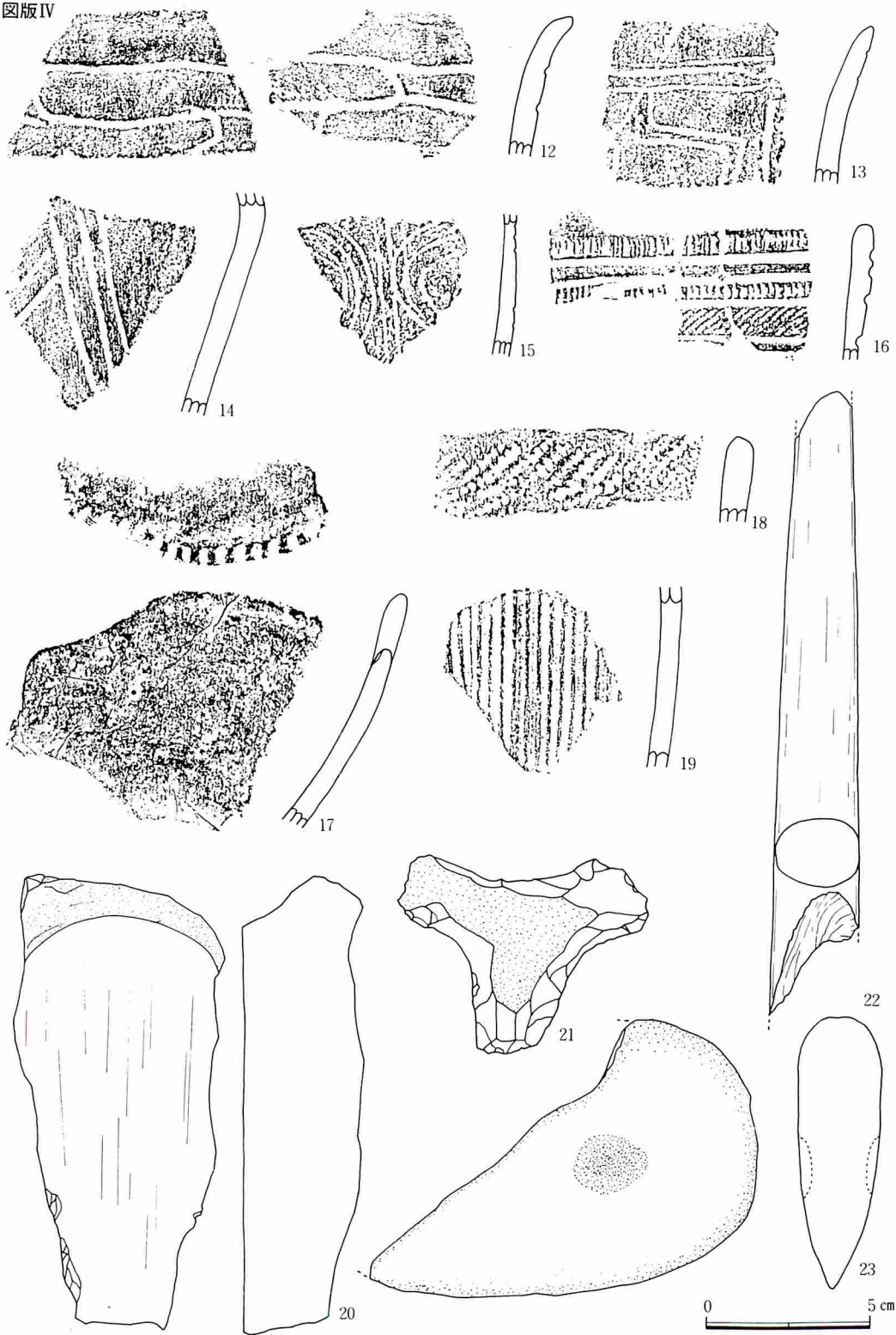




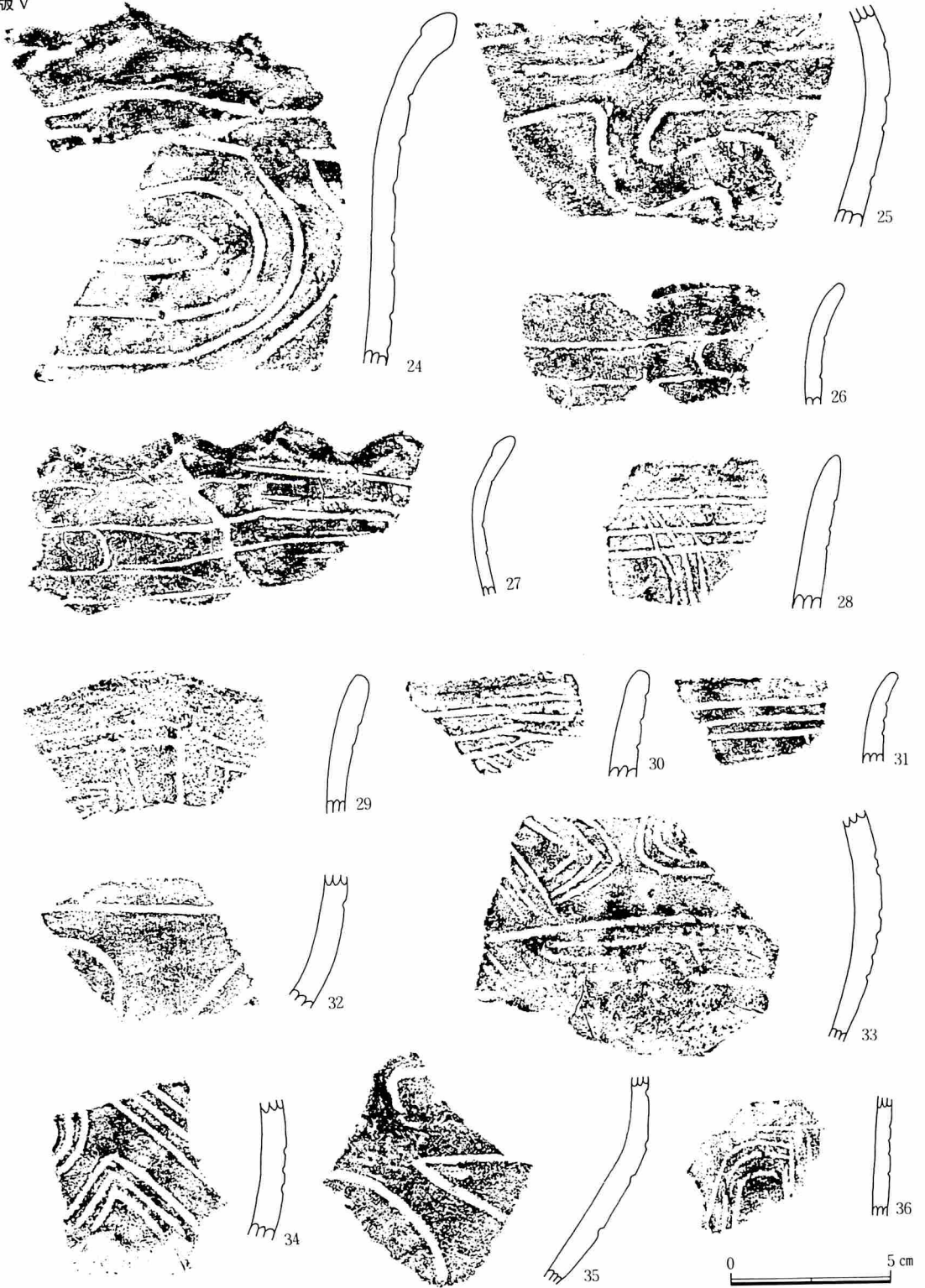
図版 III



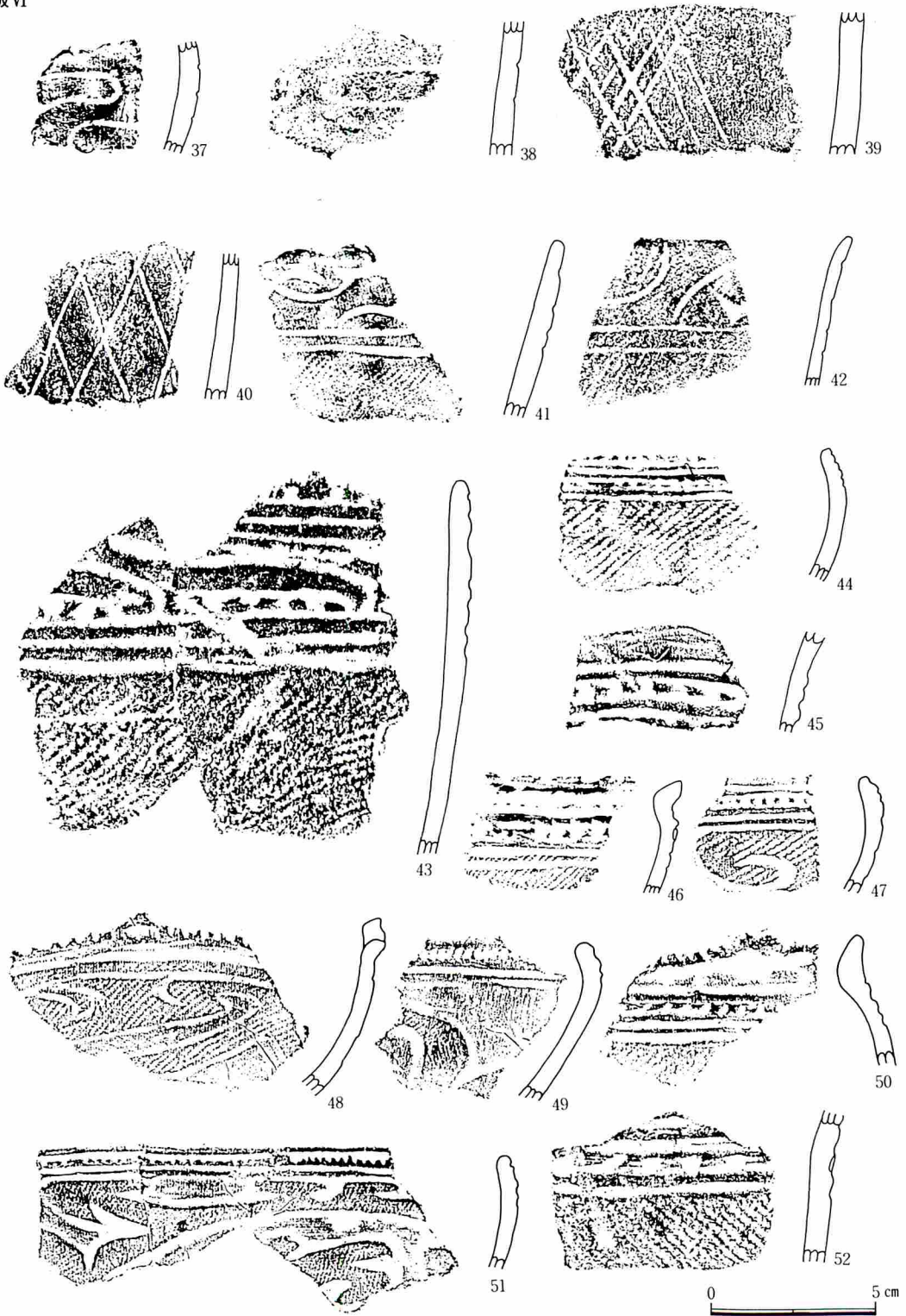
図版IV



図版 V

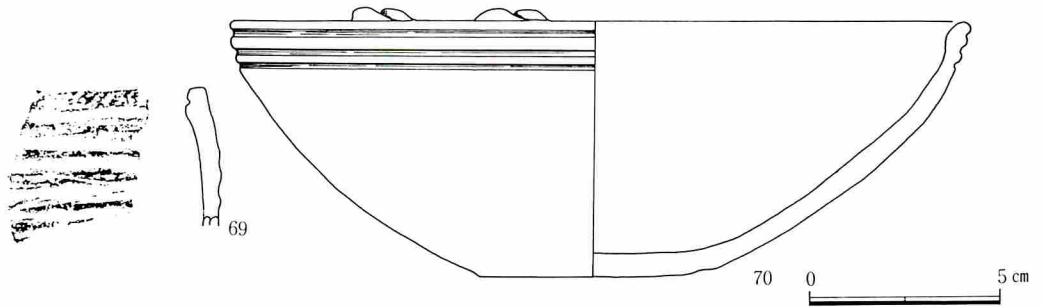
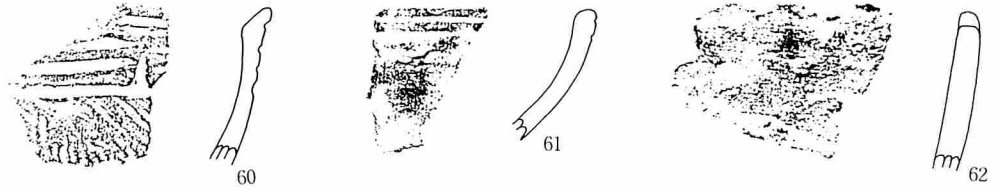
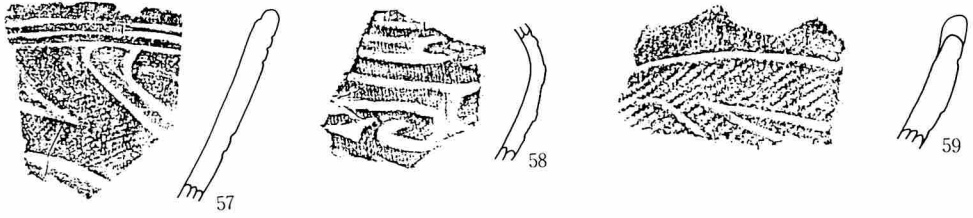
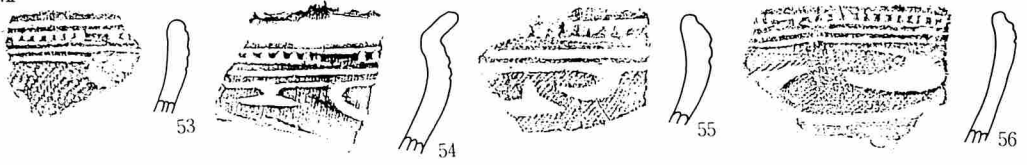


図版 VI



女川貝塚出土の遺物について

図版 VII



图版Ⅶ

